



石門

心學道統

五篇

中

9
3895
14



門口9
新 3895
卷 14

心學道文話五編卷之中

尾序之續

或男が

後の大志と夢より懐の縁もどおしく夢を信じて居る
人さるるや高つゆと移るる一さういひあるて居
後の中うるふふとも精出して仕おうさしうが。ある
附その男のひちまは八板を後とつゆの八結構は
そのので成なる。よさう八元末章落る生れ地を
人不會てハ様くりのも地中さばむて無はるの
で成なるてお言季の借鏡をぶぐ一出會中なる

心學道文話

卷中

五編

早稲田 大學 図書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

かぶるかぶる小憂こゆう若わ若わのいひありやうやうがが幽ゆう以い産さん後ごとい
 ととのの産さん夫ぶ分ぶん朋ほうがが居いりりややううややうう。そのやうやうか
 若わ若わがが一いつ向むかひひややううよりよりももううてて只ただ今いまでではは借か借か乞ぎ
 がが衆しゆ人じん本ほん来きたてもも。産さんららままのの皮かわともとも思おもひひ中ちゆうせせんん及及つつて
 多た勢せいととおお人ひとくく改かいののぶぶととうう心こころ押おりりろろのの中ちゆうに
 ろろりりややううととああききととんん中ちゆうををれればば産さん後ごのの徳とくハハ廣くわう大だい
 ありありののでで心こころ存ぞんるとといいひひややううととうう何なんとと幸さいのの毒どくなりなりの
 トトややああつつ。そそううやや朋ほうのの病びやうつつこのこのトトややううハハ横ちゆう是し凡ふん
 ろろりりこのこのトトやや。そのその中ちゆうううるる曇くもつつとと鏡かみととううとと凡ふん
 ととののとと仏ぶつ法ぽう下げ天てん影えい見けん改かい無む此こ我わが後ご悟ごももののトトババ心しん

見けん外がい道だうともともいいひひ中ちゆうににげげなながが自じ他たととちち等とうももそのその中ちゆうに
 ににどどももううららててハハああししねねうう。それそれででははややつつををううおお人ひと乃のつつをを
 ままくくとと学がくハハ人ひとのの殊じゆとと徳とくをを己おのれがが能いとと伸のびるるにに是こゝととのの夫と
 物もの連れん中ちゆうもも同どうトトるるででああししねね方かたがが。そそううにに辨しんししやや。ああららうう
 ささううハハいいふふもものの、、それそれががややつつををううおお人ひととと自じ身みハハ知しららずず
 辨しんししトトややけけききとと實じつハハ教きやうををししてて居いるるののででいいふふのの知ち
 ちちののももとと開ひらけけぬぬののトトやや。ささるるよよううつつててはは修しゆ行ぎやうハハをを極ごくまま
 人ひとののああまますす。天てん物ぶつハハ仲ちゆう間かんハハああししねね中ちゆうにに法ぽうをを寫しやうすす
 修しゆめめせせううややありありややせせねねたた教きやう小せう
 おおそそららううのの鞍あし馬まをを宅たくのの天てん物ぶつよりより修しゆ行ぎやうををししるるにに里さとハハ小せう夫と物ぶつ

威経アノ天物てんぶつとのふそのハ画え亦書かこのでも考かんがて以もらう
 ト。オラノ鼻はなの多おほいカ高橋たかはしの相あひをきく。眼めの丈だけさる人ひと
 乃すなはち悪わるい人ひとの執と度たをふんか。さういふく。とさる眼め附つさ
 ばの人ひとさる人ひと乃すなはち悪わるい人ひとといひ。いふ。さう人ひとのよ
 りや人ひとのも插さらひ消けさう。嗤わらけさよとする。トヤ
 その總そう按あんハその中なかうる天物てんぶつの前まへで他ほかのしと考かんがて
 出でらふト。ならす。ら服かみと髪かみ。一い。さう額ひらへ青筋あせ立て
 その親おや信しんといひ。けは。何なにの誰たれハ。総そう一い。さう地ち蔵ざうト
 や。おとのふとナニ。あの男おとこが何なにと知しつて居ゐる。の。何なに
 時ときくも何なにおそ。あで。か。う。い。ふ。さ。う。の。さ。う。の。

高たかさる。も。あ。つ。この。その。人ひとの。不ふ調てう法ぽうと。か。ど。一い。た。て
 づ。い。消けさう。の。何なにの。誰たれハ。誰たれ。一い。さ。う。地ち蔵ざうト
 人ひとトヤ。といふ。と。篤あつ實じつハ。い。ら。る。け。ま。と。全ぜん作さく。何なにも。知しら
 ぬ。男おとこトヤ。ち。と。さ。る。も。あ。つ。い。ひ。や。あ。る。儀ぎ。一い。さ。う。ら
 しい。トヤ。さ。う。や。何なにと。その。中なかう。ら。い。ふ。の。さ。る。れ。え。来
 ぐ。人ひとの。ま。い。世せ間けんへ。あ。つ。く。る。も。あ。つ。て。抑おさの。ま。さ。う。一い。た。て。も。も
 づ。い。ふ。と。い。ふ。さ。る。地ち蔵ざうト。あ。い。根こん性じやう。と。その。中なかう。る。相あひ
 と。あ。つ。く。る。の。し。や。さ。う。い。ふ。さ。う。や。け。修しゆり。さ。る。人ひとの。さ
 ら。い。ふ。トヤ。あ。つ。を。世せ間けんも。せ。や。う。る。天物てんぶつハ。幾いくあ。も。あ。つ。

つとて身みのこのよのけまと。抑おさのいの介。金かねがあいとらい
 やあらなり何屋やの何き清いなるめのよやいのよ
 となめい。あらけれど男と持のいの男とやと嚙
 けして千する又女中方ののいでいと魔のおほえ
 へい言ひ。やいのいと言ひいのい言ひが風俗がといわれ。い
 やあらなり向ふのかみさんハ移ろくい利ろろろ人介
 やいのい利ろろろあらけまとおとろくい病い候持
 一やらい清けらら何でもその中くい人ののいらい
 くい疑いておのまをいらいきく候らるりのいゆく
 そこでもろろ容中へい移ろくて顔いへい山いおすむゆ

伏ふしの中の境中と頂さいのい好好固固存存も持て居るが
 根ねが知恵えのまのい洗洗控控アノアノ小小さな固固存存の好風風位
 へい乃乃本本ままて魔とい思思て居る中く我候候を志
 也也をれでアやいに異もきく眼口口も人をいらい。その刻刻
 合あいてハ耳がいさい。そのららといわれ。さういわりのハ
 人の美い見見と白のい世世の情と耳もかけぬうう。
 そまで耳がいさいのいや又利利の赤いのハ熱作作のい
 中中の形態態とい実実人人の知らる日日といふ子と知
 らぬゆい何何も知らぬかさといわれ。やい。それで赤
 面めして居るのといやそれらとい又まい一ツ不ままることい

たら家も業つる後構えものあれど小部不善提のの場け
 ころのあて多く小人けけれどもと悪い言一部をつね
 ものトや業を提びさるるゆゑ来りまゐるトやけ
 きども餘の善の若もさるトやの大酒飲むの二
 悪いけきども己をうりトや悪い人も飲のの三提すれト
 トもきども。それでハ骸づつうぬの孝けすれト
 けきども肉の親父の中でハ出まぬの忠義をそせ
 ばハもれども母方乃止ぬハ眼がぬのつつて角
 けきどもと悪い方をきハきハきハ乃来来ト
 我れ候と知るあの且那と押込めるので小賢い大る麻

といふもの也後ハ何所へけても人が相人とせぬ
 中にある。その人のお人ハせぬ中にふるものが即不
 天道神佛の涕の切るのトやうう終ハハ月乃
 又尺の骸の屋もろハ中にあつて武尺ハ寸の
 拭で熱かづてもせハや廣い大道も何かまハ中に
 いらる。おんと不自由なものトやあハり
 世に中に武尺ハ寸ハ小ハ五尺のからハ金ハあハく
 さるトうて人ハ兵世の知るあハりのをめくた
 精出してハけきどもと善方へをすトや道以成
 人の自自と戒められハ教不

しても出まのりゆいありせしきこのどや。こりや
 ざよりいびでかゆいんゆありしうされこのあれん
 このせまた一理のりので重と夜と痛こと記とをん
 中うるものゆけまきて来るしあで遊と何も別くま
 ののであひうしとや。それいけぬ史小人といふのいふ
 やらけまねおとあご後とん人さう。又あご別くか
 ものの中うにるあうり又けまきて来る理とあで遊理
 と二ツのやういふあて居る。それがたをさるるあちり
 一とや。あういけまひハカノ佛法の教あごで六三世と
 いふゆと飯ふきてけまねおとお世といひけまきとい

世と現世といひあご後と来世といふて。ごみやアノ中う
 かつてあなるゆ日撮やゆ月撮のやうなるこのでも世界
 と是て別くはゆ回にあさるあごは切くてもあつてあ
 中うるは法うして悪病を治と。あごこのゆ今時の
 翁さん達や婆さん達とい別して世迷ひが深い。あう
 それも。もんる背の佛や祖師方の可老さ。あまのり
 の方便でごよそけ迷ひの丸史とまひがらあ。あうも
 誠のりい後してやういふいふ修業うり達らまき
 るゆい。あうけまき何とらうてもいかなるの心性根がらん
 まう味んであうりのとやういふ只その比喩や名目なる

己不執焉て反つて迷ひよまひと事秘る。それが誠の者
 一々の中お若しとまひの憂の中に憂とるるといふ
 そのト也。ごつぞ惟反もかむ知てけ生死は元来一理
 のりのでな分よとんとおいふト也。とりよるを四
 らめらるるうよと。さうさると才一也死るといふの言
 芳ら。おん中うにめて大分采よるるもて四存り中
 孔子操も相ふ道とてて夕も死も可也とおせしめて
 卒心知てほく居るといふのが知まる。と乾の夕の云
 差列はあひ。その候も亦で死も可也ト也。あうとら
 中うにりてておしぬ四方は。そま下の現をけからるが

生れておつた遠つもおし又死つても遠つるがそれよ生
 死のうへとらよ。ごつぞ命息のゆるぬりト也とおいおまる
 でゆなろよ。そまが正善の中心の道が知まぬう。た
 け骸をううのらで善用してゆなるのト也。あうとら
 その骸もごてりのみ乃善用序よ今一脱くうとら
 善用してゆらよトもばよのト也。それで只今も
 一ッがゆあさんごの惣名代よ夜で一ッ善用してゆ
 眼よかけよ。まづ傷及でつるゆまの世骸といふまの
 いえあつたの塵の中陰陽あつたの言とらつて冷
 つて暖いとの二ッの氣の中お押のづうと本と史と出と

金と水との又ツの音が身つてある也。その又ツの音と
 飯の結んだのかけからどとやそれでは法でんこの
 かとちのあゝ間と。飯のせくとついでに書ふ終らんを
 や婆さん達のよきつそとやるふとやア世世ハ終ら
 飯の世でぬるると何と飯の世と同一と。あうら知らんが
 ツイマア飯の世とやとつて居るが何と飯の世とつて
 とけ天の音と飯の世とや。そきとあうら書用一
 下るるとまらけ骸の暖いのが天の火の音と飯と居るの
 血とやの唾とやの行とやの泪とやのとつてよめめが
 天の水の音と飯と居るの筋とやの骨とやの尻と

天の音とやのつてよめめが天の金乃音と飯と居るの
 髪とやの鬚とやのつてよめめが天の木の音と飯と
 居るの肉とやの皮とやの腕とやのつてよめめが天
 の木の音と飯と居るのて懸るこめて乃音と飯とけ
 牙。又佛・法でつて居ると地水火風の又ツと飯の
 身とや。そきとアノ 率部婆さんつてよめめでも
 ふととや木とつて、又輪の形と利んで。そきと地水
 火風やとつて又文字と書て居るやある又高文字
 ろとつてハ天竺の文字とつて表の方へハ何れでも
 利とある一即ちその裏へ背とつて文字と書て居るや

元の本性不何をも生まざるの死るのくつよる、あゝ生感と
 も、不生不滅のりのある也、佛法に般若心經も
 不生不滅不垢不減とも説てあり又孔子採ハレ者そ
 壽矣ともおしやせられと。そきでその又形變乃らうり
 かふるもの迅いするつよそのハけ服たれとるるも修ま
 るりのでるへ。そりやそのもらトや今つよハ天理の
 流り、須更も移るとつよが、あゆみ。それよつをも世
 世界の一切事物が射く射く、流を通以のトや。それ
 それ若くつよ天と我と空とけがと。おんよも。べつ々
 とのでるへうらるるトや孔子採も川のよふりおるるれ

て水の流と流流あまき逝者如斯夫不舍晝夜と何んせ
 ぬきてハ世界に現れなき、のハ何であらふよと。かの流は
 つよ時ハ生老病死の四苦と道るりのハ、トやそれとつ
 せきて居る衣被のるでりつてえんと。まづハ衣被のおま
 とおがせしつよりので衣被の生まきこの。それうらあいつ
 たびや、使ともらうら老とよそのて衣被の年の老乃
 そまらうら細が切く肩うらあまたりする、病と云
 とのや衣被のハ、病とや。それとおさんどのが歳を
 も洗滌して補綴して、針でさうたり、つらうらや
 縫治する、グ終し、書生おけ、ハ、で縫綴し、あつて仕

まふとコリヤとよも仕申うらゝのつて襤褸葛花の中へ
 突込む。そまう斯死といふもので衣箱の底このトやも
 ー。是も衣箱の底界うらゝのトや死んこのトやが襤褸く
 のトやまゝこのトやも是でなま出た元来一理のりのら
 るのこめ合息あゝるうらゝのつて筋る若くまゝとまゝと若
 の後うらゝのトやのこゝで性あるもゝあると。いふやあゝ
 ぬやうなるものトやが酌の方うらゝのトや方一本油さゆく
 申れると。いふやうなるぬ性とあると。二ツでもあゝ
 けまゝると死ぬるうらゝ別ると。いふのーや夫であゝ
 孔子様が弟子の季路の問あゝに未生と知る

此焉そ死を知らんといふ事あり。あゝまゝと襤褸をれうら
 の襤褸の襤褸葛花うらゝまゝと衣箱の底へ押込を襤褸
 乃やぶまゝやうまゝと申れ申る。いふの物があるか
 五小糸のこゝと襤褸合のつて又世おんうらゝかゝる糸は
 五糸あゝでうらゝすゝと。あゝといふやうな述懐でも
 糸で居るやうも知まゝせんがイヤ又世お申といふもの
 その中うに歎息まゝるのでいふトや財あると襤褸
 襤褸葛花うらゝ引込まれて靴中といふものよまゝと易せん
 ぐそれも又襤褸うらゝのトや死んで靴中うらゝのトや
 のトや。その又靴中もまゝとまゝと度くは老といふて卒が

のトやををりて天理の流りハ誠小正のゆゑに
 是もて世世界の初なるものトやうまを知らせて
 やりてをりては法をハアノ物種とつゝのゆゑに
 釈迦如来の山で鬼小正をこゝろの文の緒行
 無常是生滅法生滅々已寂滅為樂といふを彫附
 二六時中小をきと突てそれゴラニシテはをり流き
 一を消て性ごとくして後て下る緒行無常と一切
 世世界よりの程のゆ何であらふと一ツとてはるといふ
 りふるいりのトやとつゝあるゆゑにやをりまると思やア
 是なる其うとるやア秋はある夜がぬとて思やア
 思ふは性もとるやア海をさると思やア
 然る一切はゆゑに思ふのでまがら天理の流り生死乃道
 トやうとて是生滅法とつゝのトやまといふ
 小人とつゝのハごま中へ生まるといふトやうとつゝのハごまの二
 十年二十年者ゆゑにをりて又死るといふ
 中へ今うとつゝのハごま後の世體のゴニヤリ繁まると時
 のゆゑトやとつゝのハごまを居るといふゆゑ今うと
 今乃道といふゆゑに今うとつゝのハごまを居るといふゆゑ
 トやそれゆゑに今うとつゝのハごまを居るといふゆゑ

のトやををりて天理の流りハ誠小正のゆゑに
 是もて世世界の初なるものトやうまを知らせて
 やりてをりては法をハアノ物種とつゝのゆゑに
 釈迦如来の山で鬼小正をこゝろの文の緒行
 無常是生滅法生滅々已寂滅為樂といふを彫附
 二六時中小をきと突てそれゴラニシテはをり流き
 一を消て性ごとくして後て下る緒行無常と一切
 世世界よりの程のゆ何であらふと一ツとてはるといふ
 りふるいりのトやとつゝあるゆゑにやをりまると思やア
 是なる其うとるやア秋はある夜がぬとて思やア
 思ふは性もとるやア海をさると思やア
 然る一切はゆゑに思ふのでまがら天理の流り生死乃道
 トやうとて是生滅法とつゝのトやまといふ
 小人とつゝのハごま中へ生まるといふトやうとつゝのハごまの二
 十年二十年者ゆゑにをりて又死るといふ
 中へ今うとつゝのハごま後の世體のゴニヤリ繁まると時
 のゆゑトやとつゝのハごまを居るといふゆゑ今うと
 今乃道といふゆゑに今うとつゝのハごまを居るといふゆゑ
 トやそれゆゑに今うとつゝのハごまを居るといふゆゑ

下のまを居るといふ

